

2017年11月5日

「わたしは良い羊飼いである…わたしは羊のために命を捨てる。」 ヨハネ 10:11-15

主イエスは、御自分こそ良い羊飼いであり、羊（私たち人間）を救うために父なる神が最後に送られた神の愛子だと言われます（→マルコ 12:1-8）。

旧約の時代にも良い羊飼いはいました（預言者たち!）が、「狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる」ような「雇い人」根性の者もいました（今も!）。主は「羊の門」として多くの羊飼いを派遣されましたが、最後の手段として御自分が来られます（→ブラジルの無牧師時代に牧師になった役員たち）。

主にとって、「この囲いに入っていないほかの羊」（ユダヤ人以外の異邦人）も大切です。「羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる」でしょう（「伝道開始百周年感謝バザー」の目的!）。

「父（なる神）はわたしを愛してくださる」のですが、それは主が「命を…捨てる」ことさえ喜んでされるからです。「キリストは、自分自身の命よりも私たちの救いを大切にす故に、御父に愛されていると確言されるのを驚く必要はない。」（カルヴァン）「父から受けた掟」に従う御子です（→14:31）。

今の時代に、羊のように不安と危険の中で生きている私たちです。命さえ捨てて守ってくださる羊飼いを、「慈しみを語り伝えん」（讃 502 番）と歌います。

2017年11月12日

「…だれも父の手から奪うことはできない。わたしと父とは一つである。」 ヨハネ 10:29, 30

冬になり、「神殿奉献記念祭」（ハヌカ—）が祝われる中で、主イエスが登場し、御自分が暴力的でない、平和的で羊飼いのようなメシアだと宣言されます。

紀元前164年に、神殿を汚した占領軍に反抗して奪回し、それを清めた英雄（マカベウス家のユダ）を思って、ユダヤ人たちは、「もしメシアなら、はっきりそう言いなさい」と主に迫ります。しかし主は、暴力や軍事力による勝利という誘惑を退けられます（→マタイ 4:8）。

主は、「わたしは言った…父の名によって行いう業…しかし…信じない」のは、「わたしの羊ではない」（羊になりたくない）からだ、と反論されます。少数でも「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける」ことが出来ます（主の弟子たち!）。

主の羊とされた者は幸いです。主は彼らに「永遠の命を与え…決して滅びず…手から奪うことはできない」者とされます。さらに「父がわたしにくださったものは、すべてのものより偉大（大切）であり、だれも父の手から奪うことは出来ない」と言われます。「これは素晴らしく美しい聖句である。」（カルヴァン）

主をメシアとして遣わされた父なる神のお考えは、「わたしと…一つである」と断言されます。羊とされた私たちは、「平和の主」（讃 130 番）を賛美します。

2017年11月19日

『わたしは神の子である』と言ったからとて、どうして『神を冒瀆している』と言うのか。』

ヨハネ 10 : 36

主イエスが御自分を神と等しい者とされることを、ユダヤ人たちは問題にしますが（→5 : 18）、それは事実です。

「わたしと父とは一つである」と言われた主を、ユダヤ人たちは「石で打ち殺そうと」します（→レビ 24 : 16）。神を「父」と呼んだり、親しく語りかけたりすることが問題ではなく（『屋根の上のバイオリン弾き』!）、「人間なのに、自分を神としている」ことが問題です。

主は、「あなたたちの律法」（旧約聖書）の中にある、「あなたたちは神々である」（詩 82 : 6）という文章を引用されます。民の指導者でさえ、そう呼ばれるのに（ファリサイ派の人々も!）、特別に「父から聖なる者とされて世に遣わされた」主が「神の子」と言われても、問題はないはず（聖書の権威!）。

主は最後に、「父が与えてくださった多くの善い業（仕事）」について、「わたしを信じなくても、その業を信じなさい」と訴えられます（仕事は嘘をつかない!）。「何のしるしも行わなかった」洗礼者ヨハネとは対照的な主です。

主は神の御子ですが、「天にまします我らの父よ」と呼ぶことを私たちに許してくださる、「永久に…変わりなき」（讃 497 番→シンプソン作）救い主です。

2017年11月26日

『わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く。』 ヨハネ 11 : 11

エルサレムから離れた所におられた主イエスに、マルタとマリア（→ルカ 10 : 38-42）から、弟のラザロの危篤が伝えられますが、すぐには行かれません。

姉妹が使用人を遣わして、「主よ、あなたの愛しておられる者（ラザロ）が病気なのです」と伝えても、「この病気は死で終わるものではない」と言い、「なお2日間同じ所に滞在され」ます。「神の栄光のため」にそうされるのです。

ラザロが死んだ後、主は「もう一度ユダヤに行こう」と言われ、弟子たちは恐れます。「昼のうちに歩けば…この世の光を見て…夜歩けば…その人の内に光がない」と、今はまだ昼だと言われます。

「世にいる間、世の光」（9 : 4）である主は、その光を最大限に輝かせる時を待っておられるのです（復活の主!）。

いよいよその時が来て、主はラザロを復活させるべく出掛けられます。行きたくない弟子たちは、「主よ、眠っているのであれば、助かるでしょう」と引きとめようとします。「ディディモ（双子）と呼ばれるトマス」だけは、「一緒に行って死のうではないか」と元気ですが、彼も主を誤解しています（→20 : 24）。

主は、すぐに助けに来られなくても、私たちを愛して「友」と呼んでくださる「慈しみ深き友」（讃 312 番）です。